

注文主に応じて字体も色使いもさまざまな書のライブの作品。左端が若山さん



筆字 客の注文で

神恵内出身の書家・若山さん「ライブ」

客の注文に応じ、その場で色紙や衣類に筆字を書き、「書のライブ」。飲食店の看板や食品ラベルのロゴ(意匠文字)を数多く手がける神恵内村出身の書家、若山健一さん(68)が札幌在住。が、「筆字を身近に感じてほしい」と始めて四年になる。余市町のホテル水明閣でこのほど開かれたライブも、目の前で完成した作品に顔をほころぼせる来場者が相次いだ。(石原宏治)



若山さんの筆で世界に一つの宝物に生まれ変わったTシャツ

目の前で作品

「身近に感じて」

「感動しています。来て良かった」—余市町内のトマト農家吉川泰浩さん(38)は長女の名前「咲良」を自分のトレーナーの背に書いてもらった。紺地にインクで白い文字とビシクの花びらが描かれた

作品に「なんか娘が背中め、「ありがとう」を繰り返してみたい。畑で著まり返した吉川さんは、さらにTシャツなど二枚を氏の名前など人それぞれ追加注文。ライブに目

追記注文。ライブに目



筆運びを真剣な目で迫る来場者

前で書いてもらえぬのが、色紙や衣類ばかりでこんなうれしいこととはなく、額装した台紙を「は」と、すっかりライオンを持ち込む人もいた。ライブはまった。地元実行委の荒木麻実(42)は「私にまで、リウマチを患う余市町子代表は「私にまで、民内の主婦高橋貞子さん(70)は「健」の字が書かれた色紙を大事そうに抱え、「胸がいっぱいに書きました」と涙ぐんだ。若山さんは「書の世界の玄人に要められるより、多くの人に喜んでいただく方がうれしい」と手応えを感じていた。

午前、午後二時間ずつのライブには、町内外から六十人が訪れた。注文も家族の名前、好きな字、自分の経営する店名、彼(女)やブルース、ハワイアンなどを日本語で歌うグループ「パンパンパサール」のコンサートと合同開催。

お問い合わせは
水明閣 011-355-222
・22200000

日曜
ふりすむ